

(西暦) 2017年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること)

回復期リハビリテーション病棟退院後の在宅脳卒中者における家事実施状況
— 予後予測因子の検討 —

学位の種類: 修士 (作業療法学)

首都大学東京大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 作業療法科学域

学修番号 16896603

氏名: 小林 竜

(指導教員名: 小林 法一教授)

【序論】家事は作業療法において重要な支援内容の一つである。2007年に交付された厚生労働省の医政局長通知で、作業療法の範囲の一つに家事等の支援が挙げられており、また、回復期リハビリテーション病棟 (回復期病棟) 退院後の在宅脳卒中者の7割以上が調理や掃除等の家事を行う家庭維持者としての役割を担っているとの報告もある (緑川ら, 2012)。その一方で、回復期病棟を退院した在宅脳卒中者の多くが家事に関して困難を感じているという報告もある (合田ら, 2015)。そこで、回復期病棟入院中の脳卒中者に対し自宅退院後における家事実施状況の予後予測が可能となれば、退院後の家事再開の可能性を検討する上で有益な情報となり、より効果的な家事への参加支援につながると考えた。

【目的】在宅脳卒中者の回復期病棟入院中の能力や本人を取り巻く社会的環境等から、自宅退院後の家事実施状況を予測する因子を明らかにする。

【方法】研究デザインは後ろ向きコホート研究である。対象は平成26年5月から平成29年4月の3年間に研究代表者の所属する回復期病棟を退院した在宅脳卒中者とした。退院後の家事実施状況は、改訂版 Frenchay Activities Index 自己評価表を用いて、食事の用意、食事の後片付け、洗濯、掃除や整頓、力仕事、買い物の実施状況を調査した。その他に、病前の家事実施状況、基本情報 (年齢、性別等)、回復期病棟退院時の能力 (10m 最大歩行速度 (10MWS)、Functional Independence Measure の運動項目合計得点 (FIM 運動) 等) および社会的環境 (家族形態等) を調査した。それぞれの家事について家事実施状況に関連する因子を分析するため、退院後の家事実施群・非実施群の2群に分け、病前の実施状況、基本情報、退院時の能力および社会的環境との関連を調べた。加えて、それぞれの家事について退院後の実施状況の予測因子を探るため、実施・非実施を目的変数としたロジスティック回帰分析 (ステップワイズによる変数増加法) を行った。全ての解析は IBM SPSS Ver.24 を用いて実施し、有意水準は5%未満とした。本研究は首都大学東京荒川キャンパス研究安全倫理委員会の承認を受けて実施した (承認番号: 16084)。

【結果】分析対象者数は128名 (平均年齢 69.9 ± 11.66 歳、男性61名、女性67名) であった。統計解析の結果、いずれの家事も病前に行っていなかった者と比べて、病前に行っていた者の方が退院後も家事を実施している者が有意に多かった。また、ロジスティック回帰分析の結果、食事の用意では感覚障害の有無、性別、FIM 運動が予測因子として選択された。食事の後片づけでは性別、家族形態、10MWS が選択された。洗濯では家族形態、注意障害の有無、性別、10MWS が選択された。掃除や整頓では手指の Brunstrom Recovery stage、10MWS が選択された。力仕事では家族形態、感覚障害の有無、10MWS が選択された。買い物では性別、FIM 運動、10MWS が選択された。

【考察】本研究の結果、本人の能力面以外にも病前の家事実施状況、性別、家族形態といった要因が退院後の家事実施状況と関連していることが明らかになった。家事への参加支援においては、本人の能力面のみならず、病前の家事実施状況や性別、家族形態に着目した評価や支援の重要性が示唆された。